

制服を脱いだ夜に～機動隊員たちの秘密～

目次

1. 第1話：衝突
2. 第2話：屈服
3. 第3話：反撃
4. 第4話：墮落（本番・前編）
5. 第5話：闖入
6. 第6話：誓い（本番・後編、結末）

第1話：衝突

藤崎蓮は鏡の前で道着の襟を直しながら、自分の顔を眺めていた。汗で髪が額に張り付いている。眉間の皺を指で伸ばしてみるが、すぐにまた戻ってしまう。訓練後の顔は悪くない。むしろ男らしさが増している気さえする。それなのに、胸の奥にある苛立ちは消えなかった。

更衣室の扉が開く音がした。振り返ると、北條慎が無表情のまま入ってくる。道着姿のまま、黙々と自分のロッカ——に向かう背中を見て、蓮は舌打ちしそうになった。

「おい、北條」

声をかけても、相手は振り向かない。ロッカ——を開けて、中から着替えを取り出す動作だけが続く。

「聞こえてんだろ」

ようやく、慎が顔だけをこちらに向けた。鋭い目つきは変わらない。

「何だ」

低く落ち着いた声。いつも通りの、感情の読めない口調だった。

蓮は鏡から離れて、慎の方へ歩いていった。

「さっきの訓練、お前わざとやっただろ」

「わざと？」

「俺を投げ飛ばした時、力加減してなかっただろうが」

慎は視線を戻して、ロッカ——から水筒を取り出した。

「組手は真剣にやるものだ。手加減する方が失礼だと思うが」

「は？」

蓮の声が大きくなる。更衣室に響く自分の声に、少しだけ我に返った。深呼吸をして、声のトーンを落とす。

「俺が言ってんのはそういうことじゃねえよ。お前、あの時明らかに……」

「明らかに何だ」

慎が水筒の蓋を開けながら、淡々と尋ねてくる。その落ち着き払った態度が、余計に蓮を苛立たせた。

「お前はいつもそうだ。何考えてるか分かんねえ顔して、実際は全部計算してやがる」

「計算？」

慎が水を一口飲んで、蓋を閉める。そしてゆっくりと蓮の方を向いた。

「お前の被害妄想だろう」

「被害妄想じゃねえよ。先週の班編成の時だってそうだった。お前、わざと俺を外したよな」

慎の眉がわずかに動いた。ほんの一瞬だけ、表情に変化が見えた気がした。

「あれは効率を考えた結果だ。お前の得意分野を考慮した上での配置だった」

「嘘つけ」

蓮は一歩前に出た。二人の距離が近くなる。

「お前、俺のこと嫌いなんだろ」

慎は動かない。ただ、蓮の目をじっと見つめている。その視線には、相変わらず何の感情も読み取れなかった。

「好き嫌いで仕事はしない」

「じゃあ何でだよ。何で俺とはいつも距離置こうとすんだよ」

慎が小さく息を吐いた。ため息とも違う、何かを考え込むような仕草だった。

「お前は……」

言いかけて、慎は口を閉じた。視線が一瞬だけ逸れる。それから再び蓮を見据えた。

「お前は感情的すぎる。判断が鈍る」

「はあ？」

「機動隊員として、それは致命的だ」

蓮の拳が握りしめられる。関節が白くなるほどの力が込められていた。

「お前に何が分かったよ。お前みたいに何も感じないロボットみてえな奴に」

「感じないわけではない」

慎の声が、わずかに低くなった。

「ただ、表に出さないだけで。それが職務に必要なだからな」

「職務、職務って……お前人間じゃねえのかよ」

蓮は慎の胸倉を掴みかけて、寸前で手を止めた。深呼吸を何度かする。拳を開いたり閉じたりする。

「……分かったよ。もういい」

踵を返そうとした瞬間、慎の声が背中に届いた。

「逃げるのか」

蓮の動きが止まる。

「今度はお前が逃げるのか、藤崎」

ゆっくりと振り返る。慎は相変わらず無表情だったが、その目には何か別の光が宿っていた。

「何だと？」

「お前はいつもそうだ。都合が悪くなると話を切り上げる」

「デメエ……」

「柔道場に来い」

慎が道着の帯を締め直す。

「話し合っても平行線だ。体で決着をつける」

蓮の口角が上がった。

「上等だ」

二人は更衣室を出て、柔道場へと向かった。廊下を歩く足音だけが響く。蓮は自分の心臓の音が聞こえる気がした。

柔道場の引き戸を開けると、畳の匂いが鼻腔を満たした。誰もいない。照明だけが静かに空間を照らしている。

二人は無言で場の中央に向かい合った。お互いに礼をして、組み合う構えを取る。

「待て」

慎が手を上げた。

「ル——ルを決める。投げ技のみ。寝技は禁止だ」

「何でだよ」

「……時間がかかる」

慎の視線が一瞬だけ逸れた。また何か隠している、と蓮は直感した。だが、今はそれを追及する気にもなれなかった。

「分かった。その代わり、一本取ったら終わりな」

「了解した」

再び、二人は向き合った。

蓮が先に動いた。襟を掴み、相手の体重移動を読もうとする。だが慎の体は予想以上に安定していた。簡単には崩れない。

互いに牽制し合う時間が続く。汗が額を伝い落ちる。道着が体温で温まっていく。

慎が仕掛けてきた。内股の構えから、蓮の体勢を崩そうとする。蓮は咄嗟に重心を下げて耐えた。二人の体が密着する。

その瞬間、蓮の呼吸が乱れた。

慎の体温が、道着越しに伝わってくる。胸板の硬さ。腕の筋肉の張り。そして、二人の下半身が接触した時、蓮は自分の体の変化に気づいた。

まずい、と思った。

だが、体は正直だった。道着の下で、じわじわと血液が集まっていく感覚があった。心臓の鼓動が早まる。それに比例するように、股間の膨らみも大きくなっていく。

「.....っ」

蓮は慌てて距離を取ろうとした。だが慎がそれを許さない。逆に、さらに強く引き寄せてくる。

二人の体が再び密着する。今度は、さっきよりも長い時間だった。

蓮の勃起は、もう隠しようがないほどに成長していた。道着のズボンが、明らかに前方に押し上げられている。このままでは、慎に気づかれる。いや、もう気づかれているかもしれない。

焦りが蓮の判断力を鈍らせた。力任せに慎を押し返そうとして、逆に体勢を崩される。

次の瞬間、蓮の体は宙に浮いていた。

背中から畳に叩きつけられる。鈍い音が場内に響いた。

「一本」

慎の声が上から降ってくる。蓮は仰向けのまま、天井を見上げていた。蛍光灯の光が眩しい。

慎が手を差し伸べてきた。蓮はそれを見つめたまま、しばらく動けなかった。自分の股間は、まだ収まる気配がなかった。このまま立ち上がれば、確実にバレる。

「立てないのか」

慎の声に、わずかな変化があった。いつもの平坦なトーンではない。何か、引っかかるような、探るよ

うな響きが含まれていた。

蓮は意を決して、慎の手を取った。

引き上げられる瞬間、二人の顔が近づく。慎の目が、蓮の目を捉えた。そして、その視線がゆっくりと下へ移動していく。

蓮の道着の前が、明らかに盛り上がっていた。

慎の表情が、初めて変わった。眉がわずかに上がる。唇が微かに開く。そして、視線が再び蓮の顔に戻ってきた。

「.....なるほど」

その一言が、何を意味しているのか。蓮には分からなかった。だが、慎の目に宿った光の意味だけは、なぜか理解できた気がした。

それは、興味だった。

蓮は手を振りほどいて、後ずさった。

「悪い、トイレ」

踵を返して、柔道場を出ようとする。だが、慎の声が背中に届いた。

「逃げるな、藤崎」

足が止まる。振り返ると、慎がこちらを見つめていた。その目には、さっきまでとは明らかに違う何かが宿っていた。

「俺は.....」

蓮の声が震える。自分でも驚くほど、言葉が出てこなかった。

「お前のそういうところが、嫌いじゃない」

慎が一步、前に出た。

「正直で、嘘をつかない。体も、な」

蓮の背筋に、冷たいものが走った。それは恐怖ではなかった。もっと別の、名前のつけられない感覚だっ

た。

扉が開く音がした。

二人同時に、そちらを向く。若い隊員が顔を出した。

「あ、先輩方。今日は自主訓練ですか？」

その声で、蓮は我に返った。慎も、いつもの無表情に戻っている。

「ああ、もう終わったところだ」

慎が淡々と答える。そして蓮の方を一瞥してから、更衣室へと向かった。

蓮は、その場に立ち尽くしていた。股間の膨らみは、まだ完全には収まっていなかった。それよりも、今起きたことの意味を理解しようとする思考が、頭の中をぐるぐると回り続けていた。

慎の最後の言葉が、耳に残っている。

正直で、嘘をつかない。体も、な。

蓮は自分の体を見下ろした。道着越しに、まだわずかな膨らみが確認できた。

これは、一体何だったんだ。

答えは出なかった。ただ、一つだけ確かなことがあった。

次に慎と二人きりになった時、何かが起こる。

そんな予感だけが、胸の奥に残り続けていた。

蓮はゆっくりと更衣室へ向かった。廊下を歩きながら、自分の心臓の音を聞いていた。それは、訓練後よりもずっと激しく鳴り続けていた。

更衣室の扉の前で、蓮は立ち止まった。中から、シャワ——の音が聞こえてくる。慎が先に入ったのだろう。

扉の取っ手に手をかける。だが、開けることができなかった。

中に入れば、また慎と顔を合わせる。その時、自分はどんな顔をすればいいのか。何を話せばいいのか。分からなかった。

蓮は取っ手から手を離して、壁に背中を預けた。天井を見上げる。蛍光灯が規則的に並んでいる。

バイクで走れば、この妙な感覚も吹き飛ぶだろうか。

だが、蓮は自分でも分かっていた。どれだけ風を切っても、今日のことは忘れられない。慎の目に宿っていた光。あの声のト——ン。そして、自分の体の正直すぎる反応。

全てが、蓮の中で新しい何かの始まりを告げていた。

シャワ——の音が止んだ。

蓮は扉から離れて、自動販売機のある方へ歩き出した。今日は、このまま帰ろう。着替えは明日でいい。

自分に嘘はつけない。それが蓮の信条だった。

だが今日だけは、自分の感情から逃げることを選んだ。

それが正しいのか、間違っているのか。

答えは、まだ分からなかった。

第2話：屈服

翌日の訓練は、蓮にとって地獄だった。

慎との視線が合うたびに、昨日のことが頭をよぎる。道着越しに感じた体温。密着した時の、自分の体の反応。そして、慎の目に宿っていた光。

蓮は意識的に慎から距離を取った。班が違う時は安堵し、同じ訓練になると心臓が跳ねた。

だが、慎は何事もなかったかのように振る舞っていた。いつもの無表情。淡々とした指示。変わったところは何もない。

それが、余計に蓮を混乱させた。

昼休みの食堂で、蓮は一人で隅の席に座った。トレ——を前に置いたが、箸を持つ気にもなれなかった。

「藤崎、今日変じゃね？」

同僚の声が聞こえたが、蓮は適当に笑ってごまかした。

訓練が終わり、夕方になった。蓮は誰よりも早く更衣室に戻り、シャワ——を浴びることにした。他の隊員と顔を合わせる前に、さっさと帰りたいかった。

シャワ——室の扉を開けると、誰もいない。蓮は安堵のため息をついて、道着を脱ぎ始めた。

帯を解く。上着を脱ぐ。ズボンを下ろす。下着まで全て脱いで、裸になった体を鏡で見る。

昨日と変わらない体のはずなのに、何かが違う気がした。肌が敏感になっているような、そんな感覚があった。

蓮はシャワ——の蛇口をひねった。温水が体を包む。目を閉じて、流れる水に身を任せる。

昨日のことを忘れよう。ただの勘違いだ。気の迷いだ。

そう自分に言い聞かせていた時、背後で扉の開く音がした。

蓮は振り返った。

慎が、そこに立っていた。

道着姿のまま、じっとこちらを見ている。その目には、昨日と同じ光が宿っていた。

「お、おい……」

蓮の声が震える。裸の体を隠そうと、咄嗟に両手で股間を覆った。

慎は何も言わずに、扉を閉めた。そして、鍵をかける音が響いた。

「な、何してんだよ」

「逃げるなと言った」

慎が一步、前に出る。

「昨日、お前は逃げた」

「逃げてねえよ。ただ……」

「ただ？」

慎がさらに近づいてくる。蓮は後ずさろうとしたが、背中が壁に当たった。

「怖いのか」

慎の声が、すぐ目の前から降ってくる。

「怖くなんか……」

「なら、なぜ隠す」

慎の手が、蓮の手首を掴んだ。力強く、だが痛くない程度の力加減で、蓮の両手を引き剥がしていく。

「やめ……」

言葉が最後まで出なかった。

慎の視線が、蓮の股間に注がれる。そして、その視線だけで、蓮の体は反応し始めた。

血液が集まっていく。心臓の鼓動が早まる。ペニスが、ゆっくりと持ち上がっていく。

「昨日から、ずっと考えていた」

慎が低い声で言った。

「お前の体は、正直すぎる」

「ち、違……」

「否定するのか」

慎の手が、蓮の頬に触れた。親指が、唇をなぞる。

「お前は嘘をつかないんじゃないかったのか」

蓮の唇が震えた。言葉が出てこない。ただ、自分の体の変化だけが、全てを物語っていた。

ペニスは完全に勃起していた。先端から、透明な液体が滲み出始めている。

慎の目が、わずかに細められた。それは、満足したような、確認したような表情だった。

「やはりな」